

『思えば遠くへ来たもんだ』

西脇市病院事業管理者・病院長 岩井正秀

「おい、研修医、おとなし過ぎるぞー。前に出て、なんか歌えーっ！」
騒がしい宴会場の中を、院長のひときわ大きな声が響きわたる。飲めない酒が過ぎて赤い顔になっていた研修医は、「えーっ？」と言いながら、ヨロリと立ち上がった。

「人生七十古来稀なり」と言われる古稀が近づいてきた。杜甫の時代ならいざ知らず、現代では稀どころか、多くの人が元気に働いている。しかし、まだ私たちが子供の頃は、七十才といえ、もう年寄りの範疇で、隠居してのんびり暮らしている世代というイメージがあったのも確かである。振り返ってみれば、自分自身がこの年になっても、こうして働いているというのは、ある意味驚きであるし、運にも恵まれていたのだと思う。

病院に勤めるため、西脇市に引っ越してきたのが三十四才の時であった。もう、すでに今までの人生の内の半分以上をこの町で暮らし、この病院で仕事をしていることになる。

就職したときは医長ですらなく、一介の内科医員であり、少ない研修医と共に働く毎日であった。当時は収益のことなど細かく言われることもなくて、患者さんのことだけを考え、ストレスも感じずに診療ができていた。そこには充実感があり、喜びもあった。

しかし、自分が責任のある立場になって行くとともに、時代は変わり、医療を取り巻く状況も大きく変化してきた。病院を保つためには、経営を考えることが重要となったのである。

医療のことしか分らない人間が経営を考えるのは大変である。しかし病院が成り立たなくなれば、それは結局、患者さんに大きな影響を与えることになる。高齢化の進むこの地域の人達が、今よりもさらに遠い病院を受診せねばならず、その結果、そこに多くの患者さんが集中し混乱することになるだろう。

それまでは、目の前の患者さんのことにのみ集中していれば良かった生活が、経営のこと、人事のことを考えることに重きを置かなくてはならなくなった。特に院長となってそれは顕著になり、兵庫県や大学の様々な人たちを訪ね、お願いをする日々は今も続いている。直接患者さんと接する時間は減ってはきたが、しかし、病院を守ることが即ち患者さん達を守ることであり、それが自分の責務であるという思いは変わっていない。

外来や病棟に多くの患者さんを抱え、昼夜を問わず診療に走り回っていた日々を共に過ごして来たスタッフも、退職などで少なくなった。しかし残っている人達は、きっと、昔からの医療に対する気持ちを持ち続けてくれており、また、私が病院の運営を考えるのは、今も患者さんのためだということを、必ず分かってくれていると信じている。その思いを胸に、必要とされるのであれば、もう少しの間、病院で働きたいと願う早春の日々なのである。

研修医はふらふらと千鳥足で前の席に進み、一礼すると、「歌います！」と言って、手拍子を始めた。

「いんちょお、いんちょおとお

いばるな、いんちょ

ア、ヨイ、ヨイ

いんちょ、けんしゅいのお

なれのおはて

ア、ヨオイ、ヨオイ、デッカンショ」

場は盛り上がり、「ええぞーっ」と声が掛かる。件の院長はと見ると、笑いながら「うまいこと言うやないか！」と言って手を叩いていた。

前に出て歌った研修医は、三十年後に西脇病院の院長になり、それを十一年続けることになる。しかし、「成れの果て」に至るまでの、そしてなってからの道のりは決して平坦ではなく、また、その日々が、苦悩と歓喜に満ちたものであることは、彼には、まだ知る由もないのであった。